

いやいやいやいや、坂井先生はほんまエエ事言いますな・・・ほんとその通りだと思います。サンフェイスの教室がこんなにたくさんあるのも、彼らの視野を少しでも広げられたり、色々な事にチャレンジ出来る機会をもっと作りたいなあ・・・なんて想いからどんどん出来ましたからww
重度の知的障がいがある子ども達と関わっていて「本人の意思」となると凄く難しい事なのかもしれません。でも、僕の経験上、子ども達の発信を見逃さなければ必ず彼ら彼女らの意思が見えてくると信じています。事実、僕の妹も重度知的障がいですが、発信してますもんね。鼻息で(笑)
ただ、その鼻息を見逃すと、ほんとほぼ発信はありません。コミュニケーション出来る環境を作ってあげる事は本当に重要な事だと思います。 久田

第61回『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

支援目標、教育目標とコミュニケーション

ICFの考え方では、活動、参加できるようにするために環境を整えることを重要視するので、コミュニケーション環境を整え、今の実態でコミュニケーションできるようにと考えることが大切になります。

このようにICFの考え方を支援や教育に当てはめていくと、これまでの支援目標や教育目標を見なおす必要があるのではないかとと思われるのですが、どうでしょうか。学校等では、卒業後の生活をイメージして、自立した生活と、それに向けた必要なスキルの獲得を目指した教育が行われています。

しかし、その人の卒業後の生活の在り方を教育目標として設定することは、果たして適切なのかという疑問が生じてくるからなのです。

もし、その目標に当事者が現実の生活のなかで抱いている思いや望み、ニーズ等が反映されていないとするならば、それは、すでに本人の目標ではなく、支援者の目標になってしまっているのではないかと考えられるのです。ICFでは、今の状態でも参加、活動することを目指すのですから、支援目標や教育目標を考えると、その人の意志を尊重することはとても重要なことであると思います。つまり、その人の抱えている望みや思いを聞き、それを実現するための支援を組み立てていくことが大切なのではないかということなのです。つまり、支援を受けながら生きていく過程そのものが、その人の自己実現の過程だということになるのです。すなわち、自己実現の過程を支援するということは、その人の人生の目標を支援することに他ならないということです。それゆえ、コミュニケーション手段の確保が重要になるのではないかと思います。

ところで、障がいのある人がコミュニケーション手段を手に入れた時、実現不可能な目標等を要求してきたら対応できないと考えて、コミュニケーション手段の確保に消極的な支援者がいるかもしれません。その人の思いや望みが、支援者側から見ると、現実的ではないと感じるからだと思われます。この問題を解決するには、障がいのある人自身が自己を理解し、自分の力でできることを知る必要があるのではないかと思います。そのためには、長期にわたって努力し、その結果、将来成し遂げるといった目標を設定するのではなく、身近な生活に即した、時間的に近く、現実的な目標の設定が大切になるのではないでしょうか。そして、目標実現の過程を努力する経験を通して、自己の力を知り、問題解決のための方法を体験できるようにするのです。この体験が本人の主体的な判断と選択する力を育てることになるからです。このような理由からも、非現実的な目標を発するとしても、コミュニケーション手段の確保は必要になるのです。そして、子どもたちは、確保されたコミュニケーション手段を使って、自分の望みや思いを周囲に伝え支援を引き出していくことになるのです。このとき、周囲で支える支援者や教師は、その望みや思いを本人に問いながら具体化し、本人が、目標実現に向けて、実行、努力する場合でも、やめる場合でも本人とコミュニケーションしながら進めていくことが大切になるのです。このとき重要なのは、障がいのある人の意志を尊重することです。周囲で支援する人のニーズや思いが優先されることがあってはならないということなのです。とても難しいことなのですが、これをしていかなければならないのです。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞(著書)

暮らしの中のコミュニケーション(やまびこ) クラスルームコミュニケーション(こころ) 出版会) 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア(エンバメント研究所) など